

# 北京歙県会館に関する一考察

——『重續歙縣會館錄』をもとに——

張 九 龍

## は じ め に

私は今まで北京における会館組織について研究して来た。しかし、従来は会館組織の全体像や社会における役割しか研究されず、もっと具体的な実例が必要であろうと感じた。従って、本稿では『重續歙縣會館錄』をもとに北京歙県会館の発展について論じたい。

まず、『重續歙縣會館錄』は1977年に大東図書会社が道光十四年（1834）の刊本をもとに出版され、明代嘉慶三十九年（1560）から清代道光十三年（1833）まで270年余りの記録を記している<sup>(1)</sup>。会館記録の中でもかなり詳細なものとされている。そして、この会館録は3回にわたって編纂・修繕されており、初回は徐世寧<sup>(2)</sup>が創立当初から崇禎十年（1637）までの出来事について整理・編纂した物である<sup>(3)</sup>。二回目は徐世寧の六世孫、徐光文<sup>(4)</sup>が乾隆四十年（1775）に改めて編纂し、最後は徐世寧の八世孫、徐上鏞<sup>(5)</sup>が道光十

(1) 『重續歙縣會館錄』は北京国家図書館蔵、影印本上下2冊の物と私が今回使っている影印本をもとに、香港大東図書会社が刊行した物の2種類がある。

(2) 明・徐世寧等編『重續歙縣會館錄』續録前集「徐世寧：原名杭，号月洲，徐村人，歷三教授龍泉縣尉」（大東図書公司印行，1977年）18頁下。

(3) 同上，續修會館錄原序「余六世祖月洲公，昔曾爲徽歙會館録一書，幾經寒暑而成，今其書僅有存者，且所載祇崇禎十年以前事迄。」11頁上。

(4) 勞逢源・沈伯棠等纂修『歙県志』卷七之二・選舉志・科目「徐光文，乾隆十年（1745）乙丑錢維城榜」（道光八年影印本；『中国方志叢書・華中地方・安徽省』第714号，成文出版社有限公司印行，1984年に所収。）550頁上。

(5) 石國柱修，許承堯纂『歙県志』卷六・人物志・宦蹟「徐上鏞，字序聲，號蓉舫，ノ

四年（1834）に編纂した。また、この会館録は会館と義荘の2部で構成されており、それぞれ正録・続録・重録の3つに分かれている。その内容については、会館と義荘の由来及び変遷・会館規則・碑文・郷会試邑人中式題名録<sup>(6)</sup>・捐輸人名が記されている。

北京歙県会館についての専論は寺田隆信・張冠増・鄒怡による3点のみである<sup>(7)</sup>。寺田隆信は徽州商人研究の一環として取り上げ、主に商人がどのように会館と関わっていたかについて論証した。張冠増は個別都市における徽州商人の活動を研究する場合、会館が非常に大きな意義を有していると指摘した上で、徽州商人と会館の関係を論じた。鄒怡は歙県会館の官民関係及び運営システムを分析することで、ヨーロッパと中国の国家と社会間の制約の相違について論じた。上記以外に、歙県会館を扱う場合は例証の一つとして取り上げることが一般的である。また、今までの先行研究は会館の商業ギルド的な側面を重視した論証が主であったので<sup>(8)</sup>、私は『重續歙縣會館録』をもとに会館の全体像を改めて論じる必要があると感じたのである。なお、本論は歙県会館録の会館編について記していた部分を中心として論じて行きたいと考えている。

歙県会館に関する現地調査については、仁井田陸氏が1943年のものが最も古いと考えられる。仁井田陸氏の調査日記は以下の様に記す。

昭和十八年七月二十三日、．．．．． 午後、歙県会館（宣武門外大街）

- 
- ㄨ 徐村人、道光丙戌（1826）進士，官兵部主事。」（民国二十六年鉛印本：『中国方志叢書・華中地方・安徽省』第246号，成文出版社有限公司印行，1975年に所収。）997頁。
- (6) 順治二年（1645）から乾隆四十年（1775）までの郷試・会試題名録。
- (7) 寺田隆信著，潘宏立訳「关于北京歙県会館」（『中国社会經濟史研究』1991年，第一期），張冠増「明末清初北京の歙県会館——徽州商人とその同郷組織——」（三鷹：国際基督教大学・アジア文化研究，19号，1993年），鄒怡「善欲何為：明清時期北京歙県会館研究（1560-1834）」（『史林』2015年，第5期）
- (8) 主な商業ギルド（或いは経済的）組織の例証として取り扱う研究については，仁井田陸『中国の社会とギルド』（岩波書店，1951年），楊聯陞「科学時代の赴考旅費問題」（『清華學報』新第2卷 第2期，1961年），王日根『郷土之鏈：明清会館与社会變遷』（天津人民出版社，1996年），陳宝良『中国的社与会』増訂本（中国人民大学出版社，2011年）など参照。

を参観<sup>(9)</sup>。江西会館と相対して街路の西にあり、歙県会館の匾額が門にかけてある<sup>(10)</sup>。門内に一個の碑あり、．．．．．中門をくぐって院子をへだてて観光堂なる殿あり、「歙徵聚聚（王翟）<sup>(11)</sup>光文」とある横書きの匾額を外に、内に「観光堂<sup>(12)</sup>」（無年号）なる匾額を中心にし清朝代々の匾額を掲ぐ。また、郷試題名と初行にあり

順治期 乙酉汪遠 鮑蘭．．．．．のごとく、順治にはじまる考試及第等の名を掲げた額が観光堂に入って左手に数枚にかけてある。また、堂に入って左右に壁面に歙県旅京同郷会章程がかけてある。観光堂なる匾額からみて左右の壁には、左右各二個の石碑が象嵌してある．．．．．観光堂を写真にしてかえる<sup>(13)</sup>。

その後、1991 年程克文氏が会館を尋ねる機会があり、在京の歙県籍名人を尋ねた結果、会館は面目全非になり、建物自体も 103・105・107 号に分かれており、103 号は住宅となり、105 号は北京市金物屋の倉庫に、107 号（旧会館の側院）は壁画や額等を飾っていた時期もあり、読書人も度々訪ねていたが、1953 年に房屋統管局が建物を解体し、残されている所も住宅となっていた<sup>(14)</sup>。現在の歙県会館跡地は宣武門外大街にあたるが、建物自体はほぼ残されておらず、かつ 102 号から 107 号まで区画が統一されている<sup>(15)</sup>。

## 一、会館録の編纂と会館建設の目的

現在の『重續歙縣會館録』は、前述の様に、3 回にわたって編纂されていた

(9) 図 1 を参照。

(10) 図 2 を参照。

(11) 王+翟、この字は見当たらず、璫の異体字ではないかと考える。

(12) 図 3 を参照。

(13) 仁井田陞輯『北京工商ギルド資料集（六）』歙縣會館・註 1（東京大学東洋文化研究所附属・東洋文献センター刊行委員会 1975 年）1172 頁。

(14) 程克文「北京歙県会館旧址尋覓録」（『安徽史学』第 1 期，1991 年）

(15) 図 4、5 を参照。

ものであり、それぞれに「序」が書かれている為、それを手掛かりに編纂過程を明らかにしていきたいと考える。その際、会館建設に関わっていた人物も検証できる範囲で随時に考察した上で、会館建設の目的についても明らかにしていきたい。まず、この会館録の構成を理解する為に、道光十四年刊行した際の凡例 3 つを選んで説明したい<sup>(16)</sup>。また、その凡例をもとに刊行年代とそれぞれに対応する部分を表 1 にまとめた。

- 一 原序統義莊於會館，名歙縣會館録，續修録因之，茲重續是編，仍遵其例

(もとの序は義莊と会館をまとめ、歙県会館録と名づけ、続修録もこれにより、ここにこの編を重続としてまとめ、またその例に従う。)

- 一 續修録分會館・義莊爲二編，編分二集，以原録爲前集，續修録爲後集。今仍其名，各加“續録”二字於上，以別之。重續者爲新集，分繫於後集之後

(続修録は会館・義莊の二編に分かれ、各編は二つの集に分かれ、もとの録を前集とし、続修録は後集とする。今もその名を継承し、各々の前に“続録”二字を加えて区別する。重続したものは新集とし、後集の後ろに置く。)

- 一 續修録成於乾隆四十年，茲錄自乾隆四十一年起，會館・義莊修建，房屋増置，産業及公議條規，捐輸姓氏，鄉會科目，均照簿一一詳載

(続修録は乾隆四十年に完成、この録は乾隆四十一年から、会館・義莊の修繕、建物の増置、資産及び条約、義捐の姓氏、郷試会試の科目を、いずれも帳簿に照らして詳細に記載する。)

(16) 『重續歙縣會館録』凡例，7 頁。

表 1

重統歙県会館録	会館編	前集 (会館原録) 明崇禎年間	後集 (統修会館録) 乾隆四十年	新集 (重統会館録) 道光十四年
	義莊編	前集 (義莊原録) 明崇禎年間	後集 (統修義莊録) 乾隆四十年	新集 (重統義莊録) 道光十四年

次に、会館録編纂の古い年代順に従って考察していきたい。まず、歙県会館は明代嘉靖三十九年（1560）歙県出身の人によって提唱され、建設された会館である。これについて、許国<sup>(17)</sup>は以下の様に記す。

徽歙の会館は、歙県の從事諸君によってつくられていた、嘉靖（1522～1566）末年に楊・鮑諸君によって提唱され、許・劉諸君がその完成を助けた、昔は菜市中街にあったが、かなり狭く、後に西城の隅に堂三重と室九個を新たに営んだ、嘉靖四十一年（1562）十二月庚辰に着工し、四十二年十二月甲子に落成した、博士鮑君は“崇義”と名づけた<sup>(18)</sup>。

以上の記載には 3 つ疑問がある、①、具体的に何年に会館を創ったか；②、具体的な場所はどこにあるか；③、誰によって作られたか。まず、許国の序にはただ「嘉靖末年に菜市中街で会館を創り、後に西城へ移った」と述べているのみだが、嘉靖は 45 年間あり、西城で再建したのは嘉靖四十一年十二月と書

- 
- (17) 『明史』巻二百一十九・列傳第一百〇七「許國，字維楨，歙縣人。舉鄉試第一，登嘉靖四十四年進士。改庶吉士，授檢討。神宗為太子出閣，兼校書。及即位，進右贊善，充日講官。歷禮部左，右侍郎，改吏部，掌詹事府。(略)卒，贈太保，諡文穆。」
- (18) 『重續歙縣會館録』續修會館録節存原編記序「萬歷十四年（1586）英武殿大學士禮部尚書許文穆公國碑記云：“徽歙會館者，歙從事諸君所建也，自嘉靖季年楊・鮑諸君倡其始，許・劉諸君葺其成，舊在菜市中街，陋隘不稱，乃營西城陬為堂三重室九個，經始於嘉靖四十一年（1562）十二月庚辰，落成於四十二年十二月甲子，博士鮑君額其館曰“崇義”」13 頁上。

いてある。従って、少なくとも嘉靖四十年（1561）前後には既に会館があったことに違いないと考えられる。次に、場所について、許国は「菜市中街から西城へ移転した。」と書かれているが、具体的な位置を示していない。方有度<sup>(19)</sup>の序には以下の様に記す。

大門の碑文記に歙県会館は、初めて菜市口にあり、まもなく正陽門の西へ移り、世廟の際に、楊良臣・鮑時惠諸君が尽力した。嘉靖乙丑（1565）・萬歴壬午（1582）・癸卯（1603）、三回に亘って修繕した<sup>(20)</sup>。

以上から、許国がいう西城とは正陽門の西あたりではないかと推測できる。つまり、嘉靖四十年（1561）前後に会館がつくられ、その後、正陽門の西に移転したと考えられる。次に、会館建設に関わっていた人物について「衆捐録」の跋文は以下の様に記す。

明代会館衆捐録は名宦・甲第・郷試・武職・貢監五条によって分かれており、義捐の多少は地位名声の高下には関わらず、多くは5・6両、少ない者は2・3銭で（中略）この録は名位ではなく義捐の多少を重んずる、すべての義なる人は、名位の尊卑に関わらず一編に合併する、名の下には字と住居・官職を書き添え、見る者はその人を知れば十分である<sup>(21)</sup>。

(19) 靳治荆・呉苑等纂修『歙県志』巻之九・人物「方有度、字方叔、號方石、羅田人、萬歴丙辰（1616）進士、授山西長治。」（康熙年間刊本；『中国方志叢書・華中地方・安徽省』第713号、成文出版社有限公司印行、1985年に所収。）951頁。

(20) 『重續歙縣會館錄』續修會館錄節存原編記序「天啟三年工科給事中方公有度云：“大門碑記云歙之有館，其初在菜市口，未幾移正陽門西，則世廟時，楊良臣・鮑時惠諸君力也。歷嘉靖乙丑・萬歴壬午・癸卯凡三次修葺。”」13頁下。

【上記の3回修繕には「續録前集」重修（前2回修繕の経緯と出資人名）18頁上下、萬歴三十一年重修會館紀實（第3回と出資人名）19頁上下、20頁上、に其々詳細な記録があり、ここでは省略する。】

(21) 同上、續録前集・衆捐録「前明會館衆捐録原編分名宦・甲第・郷試・武職・貢監五條，其捐數多寡絕不以名位而殊，多者五六兩，少者二三錢，（中略）此錄以捐輸重不以名位重矣，凡屬好義之人，無論名位崇卑合歸一編，名下書字兼註里居・官職，今閱者知其人足矣。」20頁下。

「衆捐録」には 250 人と「外邑附録」3 人の計 253 人の名前が記されており、その内 11 人を除いて、全て官僚の肩書を持っている。このことから、明代の歙県会館は官僚主導であったと思われる。その後、明・清交代の際に会館は戦火に巻き込まれて全壊され<sup>(22)</sup>、再建したのは乾隆五年である。再建の経緯について凌如煥<sup>(23)</sup>は以下の様に記す。

明代の相国許文穆公等は、かつて城西に歙県会館を建て、長年になり、すでに分からず、清代初期に、提学張山南公が自分の私宅を義捐して、郡に公に提供した。これが今の新安会館である。場所は辺鄙で、土地が狭くて人も多いので、スペースが足りず、乾隆五年（1740）侍御史南溪吳君は歙邑会館を新たにつくることを提案して、明代の面目を復旧しよとした。（中略）比部正郎黃昆華は“この事業は皆に面倒をかけず、私が責任を背負う”と言い、前人の立派な行いに倣って自分の私宅を義捐し、その規模は計 63 棟、費用はおおよそ 160 萬緡<sup>(24)</sup>。

以上の序によれば、清代初期に張習孔<sup>(25)</sup>が私宅を義捐して「新安会館」を作ったが、土地が狭くて利用者多いということで、乾隆五年に改めて会館をつくることとなった。その際、黄昆華<sup>(26)</sup>は自宅を義捐して会館となった。その

(22) 『重續歙縣會館錄』續錄前集・衆捐録「自崇禎甲申，兵火之變，館舍蕩然無能復振。」23 頁下。

(23) 民国二十六年鉛印本『歙県志』卷六・人物志・宦蹟「凌如煥，字榆山，沙溪人，由進士改翰林。」949 頁。

(24) 同上，新建歙縣會館記「乾隆七年秋月・兵部左侍郎呂人凌如煥撰「前明相國許文穆公等，曾建歙縣會館於城西，年遠不可復識。國朝初，提學張山南公，乃以其所居宅，公之闔郡，今新安會館是也。基址稍褊，地狹人衆，不足以容，乾隆五年，侍御史南溪吳君，乃倡議建歙邑會館，以復前明之舊。（中略）比部正郎黃君昆華，比部毅然曰：“此舉不煩衆力，吾當肩任其事”，於是繼踵前徽，以其所置邸第一區，概然公之於衆，計屋凡六十三楹，計值一百六十萬緡。」25 頁上。

(25) 康熙年間刊本『歙県志』卷七・舉人・順治三年丙戌科「張習孔，字念難，柔嶺下人，己丑（1649）進士」544 頁。

(26) 李斗撰『揚州画舫录』卷十二「黃氏本徽州歙縣潭渡人，寓居揚州，兄弟四人，以塩筴起家。（略）履吳字昆華，行四，謂之四元室。由刑部官至武漢黃德道。」（山東 ↗

後、乾隆二十四年<sup>(27)</sup>・乾隆二十七年<sup>(28)</sup>にはそれぞれ修繕を行っていた。これは清代に入ってから初めての再建となり、会館全体において2回目の建設となる。

最後に、3回目の会館録編纂について、徐上鏞は道光甲午年（1834）七月の序が以下の様に記す。

吾が歙会館録は明代、私の八世祖、月洲公によって作られ、乾隆乙未（1775）に、従祖杏池先生が続録を編集して以来、今まで60年になり、録板もなくなり、見ることもまれであった。道光丁亥（1827）、義荘には訴状があり、以前の記録を尋ねる為に、公匣の所蔵を探した、編録は既に残欠があり、あらためて出版せねば、後世に伝わらないし、ましてや年がたつにつれ載せることが日々多くなれば尚更である。溪吳君徳文は、続集を作る志があり、みなお金を出し合って作ろうとしたが完成できなかった。今年私が館の事を司り、同僚が再び以前の計画を提案し、録を編纂する責任を私に委ねた。（中略）5ヶ月で完成した<sup>(29)</sup>。

徐上鏞は義荘の訴訟<sup>(30)</sup>をきっかけに会館録を再編になったと記している。この義荘に関する訴訟は僅か2ヶ月で歙県義荘側の勝利で終わった。この義荘については、今後改めて考証したいと考えているので、本稿では詳しく論じない。

↘ 友誼出版社発行、2001年）335～336頁。

(27) 『重續歙縣會館録』會館增南院書齋記、26頁下。

(28) 同上、重建蘭心軒記、28頁上。

(29) 同上、重續歙縣會館録序「吾歙會館録肇自前明余八世祖、月洲公所作也。乾隆乙未、従祖杏池先生續之、越今六十年、録板無存書、亦鮮觀。道光丁亥、以義荘訟事、欲徵故蹟、檢公匣所藏、編已有殘缺、非另付梓、無以垂久遠、矧歷年當增載者、日益多昌。溪吳君徳文、有志重續集、衆贊以刊之而未果。今歲余司館事、同人復申前説、以編録之任委余。（中略）閱時五月而成。」6頁上。

(30) 同上、義荘移界興訟始末「道光七年、内務府正黃旗管理圈房人、程大等將莊屋東邊遠年石界忽行改移、指稱伊業同郷京官於南城察院呈訟得直和息結案。」99下－100頁。



以上、会館録の編纂及び会館の建設について述べてきた。会館録の編纂と建設を積極的に行うのは官僚であることが分かる。一方、会館建設にかかる費用の大半は商人から援助を受けている。また、官僚の中に先祖（父・祖父代）が商人として成功し、子供が官僚になっている場合も多く見られている。例えば、「衆捐録」の中に汪道昆という人物がみられるが、彼の祖父は塩商人として知られている人物である<sup>(31)</sup>。また、曹文植（曹振鏞の父）も塩商人と大きく関わっている人物である<sup>(32)</sup>。それ以外にも例をあげれば枚挙に暇がない程の塩・茶・銀業の従事者が会館と深く関わっている。つまり、提案するのは官僚であるが、実際に実行する為の費用は商人から得ることが多い。

また、会館がどのような目的を以て建設したかについて、嘉靖三十九年（1560）の記録によれば、会館建設の当初の目的は北京を訪れてくる同郷人間で連絡する為であると述べている<sup>(33)</sup>。しかし、清代に入ってから会館は徐々に科挙士子の為に様々な便宜をはかるようになり、道光十四年（1834）会館録編集の際に曹振鏞<sup>(34)</sup>は「会館の建設には、貢舉の士を招待するためであり、館の興廢、士の盛衰による<sup>(35)</sup>。」と述べた。つまり、会館の目的は初期の同郷人集いから科挙士子の応援へと発展したと考えられる。

---

(31) 康熙年間刊本『歙県志』巻九・人物「汪道昆，字伯玉，號南明，千秋里人。嘉靖丁未（1547）進士。」900頁，寺田隆信著，「关于北京歙県会館」「汪道昆（中略）他家从祖父玄儀那一代开始即从商，以盐商成名。」29頁。

(32) 『揚州画舫录』巻十「曹文植字竹虚，徽州人。進士，官戸部尚書。子鉉，字六畚，業塩，居揚州，淮北人多頼之。」286頁。

(33) 『重續歙縣會館録』續修會館録録存原編記序「嘉靖三十九年河南鄭州典教野航鄭公濤序云：“吾歙俗素敦鄉誼，惟以事来京渙治，各私僉懼其渙也，故萃之以會，既會矣，懼其易聯也，故聯之以館，既館矣，懼其易亂也，故申之以約，既約矣，懼其易弛也，故永之以録。”（後略）」13頁上。

(34) 『清史稿』巻三百六十三・列伝一百五十「曹振鏞，字爾笙，安徽歙县人，尚書文植子。乾隆四十六年進士，选庶吉士，授編修。（中略）道光元年，晋太子太傅，武英殿大学士。」

(35) 『重續歙縣會館録』重續歙縣會館録序・曹振鏞撰「吾歙之建會館於京師，肇自前明規模已備，厥後鄉之賢士大夫相繼經畫，以至於今，非一朝夕之故矣。夫會館之設，所以待貢舉之士，館之興廢，士之盛衰視焉。（後略）」3頁。

## 二、会館の条規

本節では会館録に記されている条規について考察していきたい。会館録の序では、会館創立当初から既に条規を定めていると明記しているが、現在では明代の条規残っていない為、確認出来ない。しかし、この条規というものは会館を管理する上で決まりことを記すものであり、会館運営の実態を知る為の重要な手かかりでもある。従って、今日に残されている条規をもとに歙県会館の管理や運営状況を考証していきたい。

現在の会館録に記されている条規は乾隆六年（1741）・乾隆二十八年（1763）・嘉慶十年（1817）・嘉慶十九年（1826）・道光十年（1830）の計5か所にわたる。基本的に条規は大きな変化がないだろうが、会館の運営状況によって多少増えたり、削られたりすることはある。つまり、条規が変わるということはその都度に何か変化が現れた為、対処方として新たに条規を作るか或いは削ることで会館の運営を修正していくのである。そこで、変化した条規を中心に確認していきたいと考える。

まず、「乾隆六年會館公議條規<sup>(36)</sup>」には会館運営の為の費用徴収方法・会館を利用する際のルール・管理人の条件などの規定が含まれている。全て15項目があり、内9項目の重要な条規を選んで考察したい。①は会館建設に尽力した人々を称えた上で、創立の目的や利用者身分についての規定である。②～⑤は会館利用にあたっての注意事項及び賃金に関する規定である。⑥は会館の管理者についての規定である。⑦と⑨は徴収されたお金の管理及び使用目的に関する規定である。⑧は具体的に官僚の義捐金額と利用目的についての規定である。

9項目の中で最も注目したいのは、商人がかなり活動しているにも関わらず会館の利用を禁止されていることである。少なくとも明代の記録では商人の利

---

(36) 『重續歙縣會館録』乾隆六年會館公議條規，31頁上～32頁上。

用を禁止することが見られないので、清代に入ってから初めて現れたことと考えられる。私は商人の利用禁止について、2つ要因があると推測する。つまり、会館の内部要因と社会的背景である。まず、商人は会館建設に大きな役割を果たしていたので、大きな力を持っているに違いない。その中で会館を不正利用することも当然あるだろうと考えられる。しかし、乾隆年間になってくると社会が安定し、政治運営するための人材選抜が一層重要となり、科挙試験が盛んな時期を迎えた。その中で、同郷人の勢力を確保する（或いは拡大する）ために、科挙による人材確保を最優先しなければいけなかった。従って、商人を管理職に留め、会館の利用対象は科挙士子に特化したのである。その結果、清代には歙県出身の進士が296人もおり、内閣大学士・尚書・侍郎・学士といった高官も数多く輩出したのである<sup>(37)</sup>。

- ① 一 會館爲潭渡黃君昆華獨力捐輸，而公衆又分助修飾，整齊置備器用等項。創立之意，專爲公車以及應試京兆而設，其貿易客商，自有行寓，不得於會館居住以及停頓貨物，有失義舉本義。

（会館は黄昆華一人で義捐し、皆が修飾を助け、設備や器具を備えた。創立の本意は、専ら公車（宮廷への報告）及び都での科挙試験に備えるためであり、貿易の客商には、各自の宿があるので、会館に居住し及び貨物を置いたりして、義挙の本意にそむいてはならない。）

- ② 一 平時非鄉試之年，謁選官及外任來京陛見者，皆聽會館作寓，每間輸銀三錢，兼批輸銀三十兩以上，其他踪跡不明以及因公差役人等，概不留住，以致作踐。

（普段郷試の年でない時、官僚任命待ち及び外任され皇帝に挨拶しに来京する人は、みな会館に居住することを許し、一部屋あたり銀三錢を収めさせる、それ以外に銀30両以上をおくる、その他踪跡不明及び公的

---

(37) 許承尧『歙事閑譚』卷十一・清代歙京官及科第（黄山書社，2001年），348～355頁。

徭役労働者等は、みな留住することをさせず、(会館の)名誉を汚さないようにする。)

- ③ 一 非郷會之年、房屋雖空、京官有眷屬者及凡有家眷人、皆不得于會館居住、蓋家口人雜一住、別无余地、且難遷移、殊非義舉本旨、其初授京官、與未帶眷屬、或暫居者、每月計房一間、輸銀三錢、以充館費、科場數月前、務即遷移、不得久居。

(郷試・会試のない年には、部屋が空いていると雖も、京官の眷属ある者及び家眷のある人は、みな会館に居住してはいけない、なぜならば家族が一旦住むと、余地が無くなり、かつ遷移することが難しいので、義挙の本意に背くことになる。初めて京官を授かった者、眷属のいない者、あるいは一時滞在する者は、その際毎月一部屋あたり、銀三錢を払い、館費に充て、科場の数ヶ月前に、必ずただちに遷り、長く住むことができない。)

- ④ 一 公車之年、如應試衆多、正房寛大、毎間二人、小房毎間一人、均匀居住、以到京先後爲定、不得多佔房間、任意揀擇、其房屋什物亦須爱惜、毀壞者着落修補。

(公車の年、もし試験に応ずる人が多くなれば、正房は大きいので、一間を二人に、小部屋は一間に一人、均等に居住し、京に到着の先後で定め、部屋を多く占めたり好みで選ぶことは許さない、部屋の備品なども大事に使い、壊したりするとなればその人の責任で修補させる。)

- ⑤ 一 外籍與本籍、原無分同異、但須郷貫氏族實有可徵者、方准入館、如無可查考、不得概入。

(外籍と本籍は、もとより異同なく、ただ出身地や氏族を確認できる者のみ、入館を許可する、もし身元を調べることができなければ、入ることができない。)

- ⑥ 一 會館擇在京殷實老成，有店業者，分班公管，每年二人輪流復始，其公匣契紙銀兩，並收支會簿，上下手算清交代，凡有應行事件，與在京現仕宦者，議定而行，京官亦每年以一二人掌管，其有差告假，交留京者接辦，無致廢弛。

(會館は在京の殷實老成，店のある実業者を選び，班を分け，一年に二人ずつ交替しながら管理する，銀兩と契約書を保管する箱，ならびに収支の帳簿は，立ち会って，決算した上で交替し，問題があれば，現役の在京官僚と共に，協議してから行う，京官も年ごとに1, 2人が掌り，もし出張や休暇があれば，留京の人に委任し，廢弛することに至らないようにする。)

- ⑦ 一 樂輸銀兩，將前已付及後續收者，皆登載明白，司年之人，不得濫行開銷花費，每年擇日公同結算，有私支未清者，鳴衆公罰。

(義援した銀兩は，前既に交付したものと後に入ったものは，みな明白に登録し，その年司る人は，支出の乱行をしてはいけない，毎年日を選んで共に決算し，勝手に支出して用途不明のものがあれば，皆に周知した上で処罰する。)

- ⑧ 一 嗣後，中甲科及中順天鄉試者，各輸銀資以立匾額，其内外官至三品上者，輸銀一百兩，輸銓科道，輸銀三十兩，援例正郎以下主事以上者，輸銀六十兩，司道以下州縣以上，輸銀五十兩，左貳以下，輸銀十兩，爲將來拓充房屋之資，或另置產取租，以爲春秋公會之需，並資助鄉會人士盤費之不足者，但内外任，悉聽量力，不必強勉。

(これより以降，甲科及び順天鄉試に合格したものは，各々資金を出し額を立つ，内外に三品以上の官僚は，銀一百兩をおくる，輸銓科道は，銀三十兩をおくる，援例正郎以下主事以上のものは，銀六十兩をおくる，司道以下州縣以上は，銀五十兩をおくる，左貳以下は，銀十兩をおくる，将来房屋を拡大の資金にあて，或いは別に土地を買って地租を取

め、春秋の公会の需要、並びに郷・会試の旅費の足りないものを補助する、ただ内外の任官は、自分の力量にまかせ、無理をしない。)

- ⑨ 一 所收銀兩，不得放債生利，惟買產坐租，萬無貽悞，司事者如擅行出入，查出公罰。

(収入の銀兩は、貸出して利子を取ることをしてはいけない、ただ土地を買って貸出することはできるが決して偽ってはいけない、もし司る人が許可なしに銀の出納を行えば、調べ出して罰する。)

次に、「乾隆二十八年會館公議條規<sup>(38)</sup>」は序に 20 項目あると書かれているが実際に 19 項目しか見当たらず、その内 6 項目は居住者に関する規定で、残りの 13 項目はお金の徴収、用途及び管理の規定である。その内、以下の 4 項目に注目したい。①は会館管理人が以前の商人から在京官僚へ変わる規定である。②、③は郷・会試及第者と官僚の徴収金額についての規定である。④は茶行が会館を援助する状況である。この条規には 2 つの変化が見られる。つまり、乾隆二十八年から会館の管理職も在京官僚になったこと、また官僚に対するお金の徴収が義務化されたことである。茶行はいつから会館に援助し始めたのかについては不明だが、乾隆二十四年(1759)になくなったことは確かである。

- ① 一 自本年爲始，闡定京官二人，輪流掌管，凡有應商事件，傳集公議而行。(後略)

(本年より、京官二人を選び出し、輪番で掌り、協議する問題があれば、みなを集めて公議してから行う。)

- ② 一 郷試中式，輸銀一兩，會試中式，輸銀二兩，登名匾額，其郷試第

---

(38) 『重續歙縣會館錄』乾隆二十八年會館公議條規，32 頁下～34 頁。

一名者、輸銀十兩以上、會試第一名者、輸銀二十兩以上、若狀頭、輸銀五十兩以上、鼎甲、輸銀三十兩以上。

(郷試に合格すると、銀一兩をおくり、会試に合格すると、銀二兩をおくり、名を額にあげ、郷試の一番なるものは、銀十兩以上をおくり、会試の一番なるものは、銀二十兩以上をおくり、もし狀頭なら、銀五十兩以上をおくり、鼎甲なら、銀三十兩以上をおくる。)

- ③ 一 京官三品以上、輸銀三十兩至六十兩、翰銓科道、輸銀十兩、郎中員外、輸銀二十兩、主事、輸銀十兩、七品京官、輸銀六兩、奉差者、輸銀十兩、外官三品以上、輸銀五十兩至一百兩、道府以下州縣以上、輸銀三十兩至六十兩、佐雜、輸銀六兩至十兩、此係公同酌定之數、不可減少、其有好義増捐者、不拘銀數(后略)

[京官三品以上は、銀三十兩から六十兩をおくる、翰銓科道は、銀十兩をおくる、郎中員外は、銀二十兩をおくる、主事は、銀十兩をおくる、七品の京官は、銀六兩をおくる、奉差のものは、銀十兩をおくる、外官の三品以上は、銀五十兩から一百兩をおくる、道府以下州縣以上は、銀三十兩から六十兩をおくる、佐雜は、銀六兩から十兩をおくる、これは皆で協議して定めた数であり、減少することはできないが、捐納として増額を希望する者は、定額にこだわらなくてよい。(後略)]

- ④ 一 茶行向有捐輸之例、乾隆十六年(1751)、公議加増、二十四年(1759)、已止不行、今核對總數、共捐輸折實銀數不及二千兩(后略)

[茶行には昔から義捐の先例があり、乾隆十六年に、公議で増やす事となり、二十四年にはすでに廃止され、今総数を確認したところ、全部を銀に換算して二千兩に及ばない。(後略)]

そして、「嘉慶十年公議條規<sup>(39)</sup>」は全て 24 項目ある。以前の規定とほぼ同

(39) 『重續欽縣會館錄』嘉慶十年公議條規、56 頁下～58 頁。

じく、ただ以下の一か所のみ新たに増えた規定がある。この頃から、会館の利用者が乱れ始め、管理は既に弛んでいる様に窺える。

- 一 會館爲鄉會試習静之所，下榻諸公敬業樂羣，所帶家人及看館人等，不得徵歌選伎，酣酒呼盧，違者議究。

(会館は郷試・会試の為の習静なところで、止宿する諸君は学業に専念しお互い切差し合い、随伴している家族及び館を管理する人は、歌妓を呼んだり、酒に酔ったり賭博することはしてはいけない、違反するものは追究する。)

「嘉慶十九年公議條規<sup>(40)</sup>」は全部 20 項目ある。主に科挙試験及び在京官僚の規定であるが、以下の規定に注意しておきたい。ここより、会館の利用者はかなり乱れていて、事件を起こしてもおかしくない程に管理が弛んでいる為、利用者のみならず、管理者に対する注意事項も含まれていたことが窺える。

- 一 會館本爲京官外官公集，暨鄉會試公車栖止而設，进年留住之人，不無稍濫，誠恐滋生事端，今擬於定議之後，除京官外官候補候選人員，暨鄉會試公車而外，概不留住，司年亦不得私自徇情。

(会館は本より京官と外官が公に集まり、および郷会試・公車の際の宿泊の為に設立されたが、近年留住する人は、少々乱れた所があり、誠に事端を起こすことが心配される、今定議した上で、京官・外官・候補・候選の人員および郷試・会試と公車以外は、留住してはいけない、その年の管理人も私情に流されてはいけない。)

最後に、「道光十年續議條規<sup>(41)</sup>」は全部 7 項目がある。下記の「邗項」については嘉慶十六年(1811)から両淮の塩商人が毎年会館を援助するお金のこ

(40) 『重續歙縣會館錄』嘉慶十九年公議條規，59 頁～60 頁上。

(41) 同上，道光十年續議條規，60 頁下～61 頁上。



とである<sup>(42)</sup>。元々は両淮の塩商人が揚州会館に毎年三千金を援助していたが、鮑桂星<sup>(43)</sup>は両淮の塩商人と相談した結果、歙県会館も同じく毎年三千金の援助を得た。

- 一 查邗項三千兩，原議以二千五百兩，爲幫貼京官，以資辦公之用，餘五百兩，原議鄉會試元卷及會試幫費一欸，均於此內支銷，近年鄉會試留京人數衆多，各項開支，日漸增加，遂致公項絀乏。(后略)

[調べによると、邗項は三千兩、元々は二千五百兩を以て、京官の公務の補助として利用させ、残りの五百兩は郷試・会試の元巻及び会試の費用として、いずれもこの中から支出していたが、近年は郷試会試のために留京する人数がかなり多く、各項目の支出は徐々に増加していたので、遂に支出がたりなくなった。(後略)]

以上、歙県会館の条規について述べてきた。それらの条規は、管理・経費・利用目的・注意事項の4つにまとめることができる。まず、会館の管理は乾隆二十八年(1763)までは半官半商人であり、それ以降は完全に官僚へと移ったのである。そして、経費は官僚と商人が共に出し合っていたが、乾隆二十八年を境に在京官僚の出資を義務化したのである。利用目的について、乾隆年間にはすでに科挙士子の利用を優先する規定が見られ、その後も保持されていた。最後に、注意事項としては主に会館を利用する際に損害があった場合、賠償しなければいけない。また嘉慶十年(1817)より、会館の利用者が乱れ始め、管理も弛んでいることが窺える。

(42) 『重續歙縣會館錄』會館歲輪經費記「吾歙會館之重葺也，余記之詳矣，以工鉅，殫衆力竭，蓄積成之，而歲時經費遂無出，會兩淮諸君子，有公助揚州會館之舉，歲凡三千金，其議自侍郎阮芸臺夫子發之，余乃與同人謀曰：「歙於淮亦梓鄉也，蓋援揚例，以請乎。」皆曰：「諾」(中略)自(嘉慶)辛未年始，准予辛工項下歲支三千金，助歙館經費，如揚例，于是歲修・年例，一切費皆裕。」，54頁上。

(43) 『清史稿』卷三百七十七・列伝一百六十四「鮑桂星，字双五，安徽歙县人。嘉庆四年进士，选庶吉士，授编修，迁中允。九年，典试河南，留学政。十三年，典试江西。十五年，督湖北学政。累迁至内阁学士。」

## 終　わ　り　に

本稿は『重續歙縣會館錄』の会館編をもとに、会館録の編纂・建設目的・条規について述べてきた。会館は明代嘉慶三十九年（1560）に建設されて以降、官僚と商人が共に会館の建設や運営を携わってきた。まず、会館録の編纂は地位の高い官僚が主導していることが分かる。そして、会館の目的は時代によって変化していた。明代には明白な利用目的がなく、単に官僚や来京した同郷人が連絡する為の拠点として設けられていたが、清代に入ると専ら科挙士子の為になっていた。最後に、条規は明代のものが残されておらず、清代乾隆六年（1741）からしか記されていない。この条規を分析することで会館の運営状況を明らかにしたのである。

今後、他の会館を考察した上で歙県会館と比較し、それぞれの相違点を探りたいと考える。また、この様に幾つかの会館を比較することで北京にある会館の運営や目的の全体像を描き出したいと考える。その際は、単に文献や先行研究を利用するだけでは不十分と実感しているので、自らの現地調査も必要だと考えている。更に、今回は会館編しか考証していないので、今後には義莊編も視野にいれて研究したい。

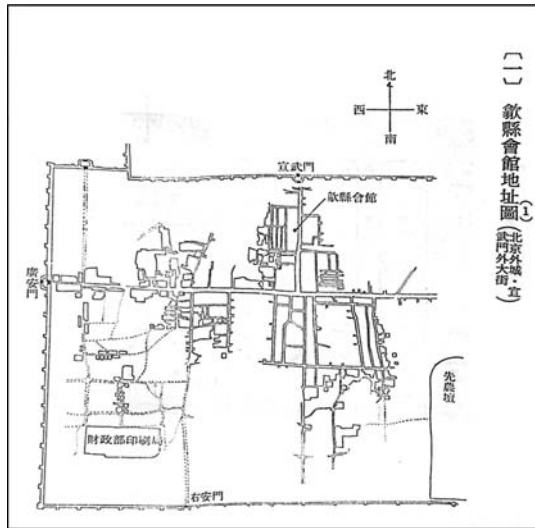


図1 仁井田陸輯『北京工商ギルド資料集（六）』歙縣會館より



図2 同上

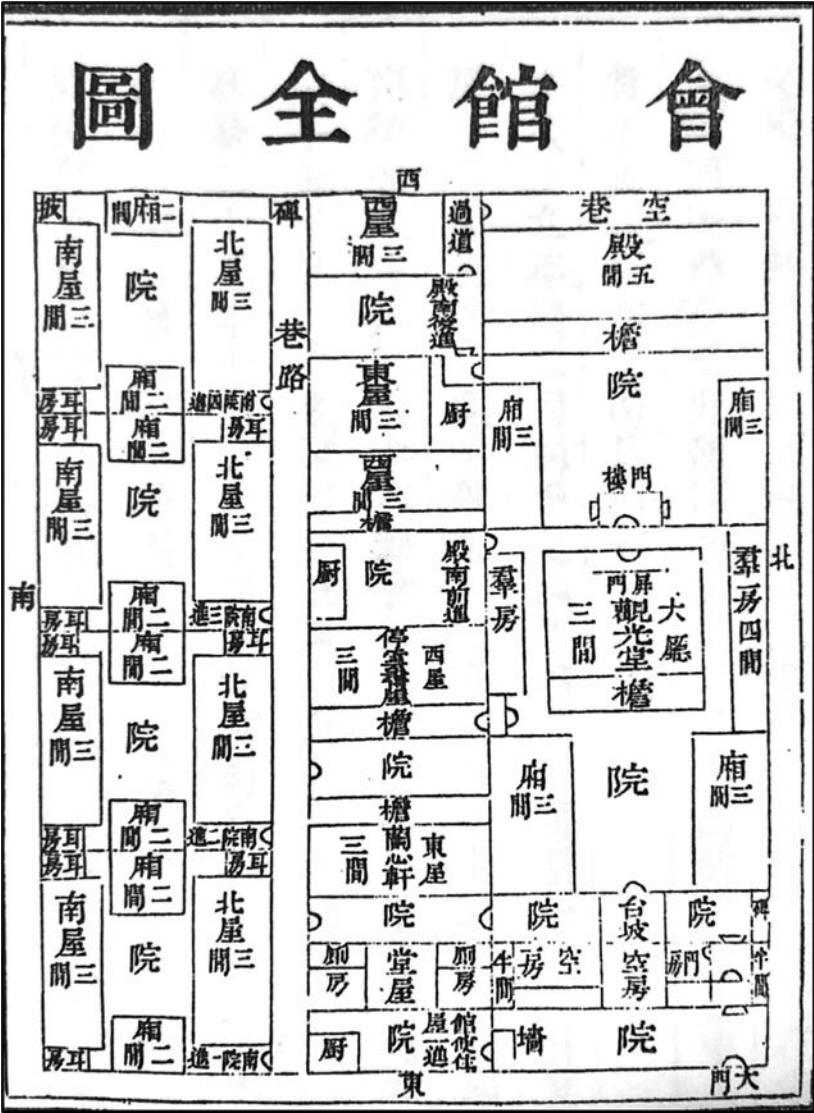


図3 『重續歙縣會館錄』 會館全図により



図 4(44)



図 5

- (44) 図 4 は北京在住の友人を頼んで現地に行って、撮影された写真になる。図 4 は現在会館の様子で、撮影場所は図 5 マップの中央下囲まった P から撮ったもので、外側大きな□は現在歙県会館とされている部分になる。この□は宣武門外大街 102 号から 107 号にあたる場所で、現在は外側に壁を設置しており、中で工事を行っている為、入ることができない。
- ※図 5 のマップは「腾讯地图」より（2020 年 3 月 9 日アクセス）、図 4 は 2020 年 3 月 7 日に撮影した写真である。

## 参考文献

## I 正史：

張廷玉撰『明史』（中華書局，2006年）

趙爾巽等撰『清史稿』（中華書局，1976年）

## II 会館録・小説：

許承堯『歙事閑譚』卷十一・清代歙京官及科第（黃山書社，2001年）

明・徐世寧等編『重續歙縣會館錄』（大東圖書公司印行，1977年）

李斗撰『揚州畫舫錄』（山東友誼出版社發行，2001年）

## III 地方志：

石國柱修，許承堯纂『歙縣志』（民國二十六年鉛印本；『中国方志叢書・華中地方・安徽省』第246号，成文出版社有限公司印行，1975年に所収。）

勞逢源・沈伯棠等纂修『歙縣志』（道光八年影印本；『中国方志叢書・華中地方・安徽省』第714号，成文出版社有限公司印行，1984年に所収。）

靳治荆・吳苑等纂修『歙縣志』（康熙年間刊本；『中国方志叢書・華中地方・安徽省』第713号，成文出版社有限公司印行，1985年に所収。）

## IV 論文：

寺田隆信著，潘宏立訳「关于北京歙県会館」（『中国社会經濟史研究』1991年，第一期）

張冠増「明末清初北京の歙県会館——徽州商人とその同郷組織——」（国際基督教大学『アジア文化研究』19号，1993年）

程克文「北京歙県会館旧址寻觅录」（『安徽史学』第1期，1991年）

鄭怡「善欲何為：明清時期北京歙県会館研究（1560-1834）」（『史林』2015年，第5期）

## V 史料集：

仁井田陸輯『北京工商ギルド資料集』（東京大学東洋文化研究所附属・東洋文献センター刊行委員会1975年）